

聖書：コリント人への手紙第二 1：6～11

説教題：これからも救い出して

日時：2024年9月8日（朝拝）

先週からコリント人への手紙第二を読み始めています。今日は2回目です。先週は1～5節までを見ました。最初の挨拶の後、パウロは3節で「私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように」と神を賛美し、まず述べたのが苦しみの問題でした。なぜこのことから話を始めたかと言えば、前回述べましたように、コリント教会の中にパウロが色々な苦難に遭っているのを見て彼を見下げる人たちがいたからでした。コリントはアカイア地方の首都であり大都市でした。その当時の文化にも影響されて、人々の間では栄光や名誉を獲得することが賞賛され、リーダーとなる人は恥を避けるべきと考えられていました。なのにパウロは苦難の中で生きています。そういう彼を見て、あるコリント人たちに恥ずかしいと思ったのです。あれは神からの祝福がないしるしではないのか。彼は使徒ではないのではないのか。そこでパウロは苦しみがキリスト教信仰において持つ位置についてまず話すのです。

前回彼が言ったのはクリスチャンに苦しみはつきものであるということです。5節にあったように、「キリストの苦難」と呼ばれるべきものがあります。この世は神から離れ、神が遣わしたイエス・キリストを拒否した世です。そしてイエス様を十字架に付けました。そんな世で私はキリストを信じると告白し、その方に従う歩みをするなら、色々な苦しみを受けることは避けられません。ですからこれを経験していることはむしろ真の使徒、あるいは真のクリスチャンのしるしであると言え言えます。しかし神はその人をただ苦しみの状況に放置されません。4節に「神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます」とありました。神はキリストの十字架と復活のみわざに基づいて必ず慰めを与えてくださいます。最終的な救いばかりでなく、今私たちが生きているこの世においても、实际的・具体的な慰めと救いに生かしてくださるのです。そしてこの神の慰めは他の人々を慰めるために与えられるということも言われました。ですから私たちは自分が神からの慰めを受けた時、自分のところで止めてしまってはならないのです。他の人を慰めるためにそれを用いなければなりません。今日はその続きとなります。

まず6節の最初に「私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの慰めと救いのためです」とあります。これはどういう意味でしょうか。これはパウロたちの福音宣教のことを言っていると思われます。コリント教会のある人たちは苦難を毛嫌いしていましたが、パウロたちは苦難を避けようと思えば避けることができました。危険を回避し、自分たちが傷つかない安全な場所に引っ込んでいることもできました。しかしそれでは異邦人世界に福音を伝えることはできません。そこでパウロたちは宣教に伴う苦しみを甘んじて受けながら福音を伝えました。それはあなたがたの慰めと救いのためだと言います。そのような恩恵を受けている側なのに、苦しみを経験しているパウロたちを卑しく思ったり、彼は使徒ではない！などと言うとは一体どういうことでしょうか。つまり彼らはパウロたちが受けている苦難の意味を全く理解していないということです。楽して福音を伝えることはできません。神に逆らうこの世で福音を伝えることには苦難が伴います。それは彼らの主張とは反対に真の使徒であることの証拠とさえ言えるものなのです。

また「私たちが慰めを受けるとすれば、それもあなたがたの慰めのためです」とあります。パウロたちは苦難だけではなく、神からの慰めも受けていました。その慰めは、4節にあったように、他の人たちを慰めるようにと神が与えてくださったものです。ですからその慰めもコリント人たちに益を与えるものです。6節最後に「その慰めは、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます」とあります。ここにコリント人たちも苦難の道を歩くべき者であることが言われています。先程来繰り返して述べていますように、この世で主に従う道を真に進むなら、苦難は避けられません。その際、コリント人たちはパウロたちが受けた慰めを知って励ましを受け、自分たちが直面している苦難を乗り越えて行くようにと力づけられ、勇気を与えられることになるのです。

そして7節でパウロは「私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません」と言います。「なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです」と。ここでもコリント人たちも苦しみを避けて通ることはできないことが前提にされています。彼らもキリストに従う者として苦難を経験します。そして彼らも、そういう人に与えられる慰めを経験します。この両方にあずかっているのが真のクリスチャンであるということです。ですからパウロは彼らの救いを疑わないと言います。苦しみをよけて通り、その

ためにその先にある慰めも知らない人についてはパウロは確信を持ってません。その人は本当に主を信じ、主に従う道を進んでいるのか、甚だ疑問であるということになります。キリストに従うがゆえの苦難と慰めの両方を経験している者こそ、真の救いの道を進んでいる者であり、その将来の救いを私は疑わないとパウロは言っているのです。

こう述べてから8節以降でパウロは自分が受けた苦難と慰めについて証ししています。8節に「アジアで起こった私たちの苦難」とあります。パウロはそこで非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。これは具体的にどんなことだったのでしょうか。学者たちによって色々な可能性が論じられていますが、断定することは難しいようです。しかし可能性が高いのはアジアの首都エペソでパウロが受けた迫害ではないかというものです。前のIコリント15章32節には「エペソで獣と戦った」という言葉が出て来ます。これは実際の獣と戦ったというよりは、命を狙う敵対者たちによって引き裂かれそうになるほどの苦難を受けたということでしょう。また同じIコリント16章8～9節には、五旬節までエペソにいと記され、「反対者も大勢いる」と書かれています。また使徒の働き19章にはエペソでパウロたちが巻き込まれた暴動のことが書かれています。これらのどれなのか、あるいは他のことなのか、明確には分からないのですが、とにかくその時パウロたちは、9節にあるように「死刑の宣告を受けた思い」になりました。つまりもう終わりだ！一切の望みが断たれた！そのように思う状況があったのです。その彼の思いとは、単に自分の命が終わりになるということだけではなかったでしょう。働きはまだ道半ばです。彼はその時、第三次伝道旅行でエペソにいました。これから異邦人の諸教会を回って、貧しいエルサレム教会への献金を募り、それをもってユダヤ人教会と異邦人教会の一致を確かなものにするというプロジェクトも果たせないままとなります。コリント教会を初めとする様々な教会の未解決の問題も残っています。またさらなる西方伝道の願いもあります。神から異邦人宣教の使命を与えられたのに、それらがここで無に帰すのかという思いもあったことでしょう。

しかしこの苦難を通してパウロは素晴らしい慰めを受けたと言います。以下、三つのことを彼は述べています。まず一つ目はこの苦難の目的です。それは9節後半にある通り、「私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです」ということです。あのパウロも今回ばかりはもう終わりだ、こ

れが限界だと思う時があったのです。絶望的な境地に彼は至ったのです。しかしそれはただ神の力によって生きること学ぶための導きだったと彼は言います。ここに「死者をよみがえらせてくださる神」という表現がありますが、これで思い起こす他の聖書箇所はどこでしょうか。それはローマ書4章でアブラハムについて述べられているところです。アブラハムは老齢になり、もはや子どもを生む可能性については死んだも同然の状態にありました。しかしそのように人間的には全く望みを持ってない状態に至って初めて、ただ神の力により、約束の子イサクを授かりました。ここでのパウロも同じです。彼も自分としての限界を超える手前では、まだ自分の知恵や力によって生きることができました。しかしその限界点を越えた時、死刑の宣告を受けた思いとなりました。しかしそこに至って、まさに死んだ者をよみがえらせてくださる神の力を彼は体験したのです。ですから私たちも苦しみにある時、思うべきです。これは自分の力によらずして、ただ神の力により頼んで救われることを学ぶための時なのだ、と。

二つ目はこの経験を通してパウロが持った確信についてです。10節：「神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。」パウロは今回受けた経験を将来に適用しています。私たちもそうすべきです。私たちにも神からこれまでいただいた多く経験があると思います。それをそこで終わりにしないことです。神はそこで大切なことを教えてくださいました。そのことを将来に適用するのです。神はこれからも同じ神として私を導いてくださると。しかしパウロがここで言っていることは、今後も地上的な災いのすべてから必ず救われるということではありません。もしそうであれば彼は永遠に死ねないということになってしまいます。言うまでもなく私たちの地上の生命には限りがあります。死によってこの世を去る時が来ます。しかしそのように語るあまり、私たちはもしかすると神の救いを将来にだけ限定しやすいかもかもしれません。死後の救いを保証するのがキリスト教であって、この世での救いについてはあまり期待すべきではないと。しかしここでパウロが言っていることはその反対ではないでしょうか。究極的な救いは確かに将来にあります。しかしパウロがここで見ているのは、それよりもずっと手前の、今ここに私たちが生きている時からのことです。キリストによる贖いは成し遂げられ、その恵みは今私たちがここにある時から私たちに与えることができるものとなっています。私たちはもちろん神の最善の知恵にお委ねするのですが、やがての将来における救いばかりでなく、今ここにある時も、

神が私たちの思いを超えて救ってくださることを期待し、求めて良いのです。絶望的な状況に至った時、将来だけではなく、今ここでも救い出すことのできる神を見上げ、その神に希望を置いた歩みをささげて行くことができるのです。

最後三つ目にパウロが述べているのは祈りの必要性についてです。11節：「あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。」神は私たちの思いを超えて救いのわざを行ってくださいますが、一方で私たちに求められているのはこの祈りです。パウロは自分が祈るだけでなく、コリント人たちにも祈りを要請します。祈りは私たちが弱者であることを告白する行為です。自分の力ではできませんと告白しているわけです。そのように自分の弱さを認めて神に信頼するところに私たちの思いを超える神の力が働きます。こうしてパウロたちは多くの人々の祈りに支えられ、助けられて、神から恵み・救い・慰めを与えられるということが起こります。そしてそれを知った人々は神に感謝するようになるのです。これはパウロに対してだけでなく、お互いに対してそうすべきことです。私たちは誰かのために祈ってあげるだけでなく、自分のためにも祈ってもらうのです。自分もそのように他の人々の祈りを通して支えてもらう必要のある弱者であることを認めて良いのです。その祈りを通して人の思いをはるかに超える神の力が現わされます。とりなしの祈りをささげた者も、その祈りを祈っていただいた者も、ともに神の慰めを体験し、味わって神にこそ感謝と栄光を帰すように導かれるのです。

以上、パウロは苦難から話を始めました。私たちはこのキリストの苦難をどう考えているのでしょうか。もし私たちがあるコリント人たちのように、この苦難を毛嫌いし、なるべくここから遠ざかって歩もうとするなら、どういうことになるでしょう。その人は今日の御言葉によれば、自分の人生において死者をよみがえらせてくださる神の力を体験しないままの人となります。その人はただうわべだけの、キリスト教の醍醐味を知らない、クリスチャンのふりをしただけの浅い人生を歩むだけの人となってしまいます。そしてこの神の力を知らないということは、一生の間、自分の力に頼るだけの虚しい人生を歩むことを意味します。

主に従う人には「キリストの苦難」と呼ばれるものが与えられます。イエス様は言われました。「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マルコ 8 章 34 節)。主に従う中で、もしこのような

苦難が与えられるなら、それは主に従っている者のしるしであると受け止めて、それを受け入れて歩む者とされたいと思います。その人に神は、パウロがここで語っているように、あふれるほどの慰めを用意しておられます。私たちがたとえ、もう終わりだ！と思っても、死者をよみがえらせてくださる力をもって、私たちの思いを超えた祝福に生かしてください。私たちはその経験を重ねて、神はこれからも救ってくださるとの一層の確信を持って歩むように導かれます。その神を見上げて自ら祈り、また兄弟姉妹にも祈っていただく者でありたいと思います。そうして神がくださる豊かな慰めとともに慰められ、この主イエス・キリストの父なる神、あわれみの神、あらゆる慰めに満ちた神にすべての栄光と感謝をささげる歩みへと導かれたいと思います。